

日本台湾学会 ニュースレター

第11号 2006年3月

特集 石田浩先生追悼文集

本学会理事長の石田浩先生（関西大学教授）が2006年1月8日に台北の国立台湾大学病院でお亡くなりになった。追悼文を募ったところ、多くの方からご寄稿いただいた。ここに掲載し、石田浩先生のご冥福を御祈りすることとした。

なお、掲載順序は編集部への原稿の到着順とした。（編集部）

弔辞—お別れの言葉 関西大学学長 河田悌一

以下の追悼文は石田浩先生が勤務した関西大学の学長、河田悌一が、2006年（民国95年）1月15日に台北市第一殯儀館 大覺廳でおこなわれた「故 石田浩先生 奠禮」に捧げた弔辞（関西大学副学長、加勢田博経済学部教授代読）である。

謹んで、関西大学経済学部教授 石田浩先生のご霊前に申し上げます。

石田先生、先生の突然のご逝去の報に接し驚き、言葉もありません。先生が台湾に向かわれる直前の去る9月に、関西大学のキャンパスで先生とお話したとき、先生はあのいつものように情熱的な口調で、今回の台湾での研究活動の目的である「中台経済の緊密化が東アジアに与える影響についての研究」について語られました。そのお顔を思い起こしますと、先生の突然のご逝去は私のみならず誰も思いも寄らないことであります。それだけに悲しく残念でなりません。

先生は台湾・中国経済にかかわる事象を専門としておられました。とりわけ現地での調査に重きをおき、実証的に研究をおこなってこられました。現地で生活されている方々から直接お話を聞き、研究活動に活かしておられました。毎年、台湾、中国をはじめアジア諸国へ調査ならびに資料収集に出かけられ、時には、学生を同行させアジア諸国の実情を肌で感じさせるといった教育、研究活動を積極的になさっておられました。先生の教え子には、台湾、中国などアジア諸国との関係が深い仕事についているものも少なくありません。また、アジア諸国からの留学生で、先生の許で学んだ学生も数多くおります。海外に出られたときには、現地で活躍する教え子との交流も先生の楽しみの一つでした。

一方、先生の先駆的かつ先進的なご研究は学界で高い評価を得ておられ、日本台湾学会理事長、日本現代中国学会常任理事、台湾史研究会代表などの重責を担われました。日本のみならず、貴国台湾、中国さらには欧米においても著名な学者、アジア経済研究の第一人者として、学界や社会に対して多大の貢献をしてこられました。昨年3月には、台湾・中国で調査されたものを詳細に分析された『台湾民主化と中台経済関係—政治の内向化と経済の外向化—』を上梓され、政治と経済の観点からみた台湾の輝かしい未来を予測されています。

先生は、1976年に京都大学大学院を修了され、関西大学には1981年に専任講師として着任されました。1989年に教授に就任して以来、学内にあつては経済学部長代理などの要職を務められるとともに、経済学部の中心的な存在として二十数年の長きにわたり学生・後進の指導と育成に力を尽くされ、本学において大きな貢献をなさいました。

このたびの在外研究の成果をもって、この4月からお元気なお姿で学生や院生を厳しく指導して頂きたいと願っておりましたが、それがかなわぬこととなったことが悔やまれてなりません。もちろん、そのことは、先生ご自身と奥様と3人のお子様方が最も無念に思っておられることと推察いたします。天は無情であります。

今、関西大学、そして台湾研究、東アジア研究はきわめて大事な時期にさしかかっております。その意味でも先生には、もっとも関西大学の発展のためだけでなく、日本と世界の台湾研究、東アジア研究のために頑張ってもらいたいと思っておりました。それだけに、私は同じ中国学を専門とする三十五年来の友人として、残念でなりません。

どうか、先生、これからもご家族の幸せな行く末と関西大学そして日本と台湾の学術交流の発展を見守っていて頂きたい存じます。

石田先生、どうぞ安らかに眠りください。

合掌
2006年1月15日
関西大学学長 河田悌一

石田ゼミに同行した頃
やまだあつし（名古屋市立大学）

石田先生に初めてお目に掛かったのは、1988年5月27日と日記にあります。森田明先生を頼って大阪市立大学の大学院に入学した私は、森田先生が当時は主催しておられた台湾史研究会に参加しました。その例会の席でした。

それから半年後、石田先生から海南島行きを誘われました。学部のゼミ旅行で海南島へ行くのだが、団体扱いにするには1名足りないのでは入らないか、という話だったかと思えます。今なら海南島は簡単に行けますが、当時は違いま

す。旅行社側でも、石田ゼミ一行にガイドを社費で同行させて現地調査するという時代でした。私も海南島へは行ったことがなく、また日中戦争中の台湾史と関係ある島なので、喜んで参加しました。旅行は1989年2月21日から1週間でした。日本ではちょうど大喪の礼、中国は天安門事件の3ヶ月余り前です。飛行機の都合で上海・広州を経由し、海口から上陸、島の東南を半周しました。旅行中の先生とゼミ生の印象は、活発の一言でした。先生は街々でゼミ生を連れて、夜中まで歩き回っていたと記憶しています。食欲も旺盛で、人数が多いこともあってか、食事がテーブルに置かれると一瞬でなくなっていました。

ゼミ旅行について行ったのがきっかけにもなって、大学院の石田ゼミに参加するようになりました。大学院では、隅谷他『台湾の経済』、『解構党国資本主義』、『防制地下金融活動問題之研究』、『戦後台湾経済』、『戦後台湾公営事業之政経分析』、野村総研『香港と華人経済圏』、アジ研『東北アジア経済圏の胎動』、『解剖台湾経済』、平川編『アジアNIEs』などを読みました。旅行の方も、中国や台湾の旅行や調査に何度か同行しました。

次に学部でのゼミ旅行に参加したのは、1994年11月27日から5日間でした。選挙見物を兼ねて台湾一周ツアーにゼミで参加したのに、私も同行しました。今回も先生とゼミ生は活発で、夜は毎日街歩きです。私も選挙見物のため夜の街歩きをしましたが、10時には宿に戻っていました。先生たちは毎日午前組で、昼も起きてツアーの強行軍（高雄からガラピ経由で花蓮まで1日で走る）をこなしていましたから、その体力には脱帽ものでした。

その後の石田先生のご活躍は皆さん、ご存じと思います。あの頃から10年余、石田先生は立ち止まらず駆け抜けたという思いがします。

石田浩先生のこと 北波道子（法政大学）

昨年末に石田先生が台北で入院されたと聞いて、驚きはしたものの、いつものようにご無理が祟られたのではないかと思った。先生は、在外研究に行くためならば必ず無理をしてでも時間を作られる。そして、渡航後に大体一度は体調を崩されるので、今回も多分それだと思っていたのである。それが、一向に回復されないまま1月8日に急逝されたと聞いて、ただただ呆然としている。私自身は、今もまだ先生の死を実感していないので、追悼文を寄稿することに抵抗があるが、「キミ、僕の追悼文、書かなかっただしょう」とどこかでお会いした際に叱られるような気がして、書くことにした。

私は大学院から先生の学生となったが、ご友人から「走路一本書」とからかわれるほど熱意と行動力が溢れる先生の研究スタイルには、学ぼうとしても自分には真似できないほどのバイタリティが必要であると痛感することがよくあった。ただ、先生の研究および教育の根底に流れる姿勢は、ずばり「弱きを助け、強きをくじく」であったように思う。日本人は「判官鼻眞」だからとよく口にだされ、国際社会では中国にいじめられる台湾に深い関心を寄せ、中国農村では社会的に上昇の希望がないと嘆く農民たちに心から同情された。ゼミ合宿で学生と卓球をするときでも、上手な学生にはとことん鋭い球を返し、どうにもこうにも下手な私には山を描く緩めの球を打ってくださった。私はそんな球でも上手く返せたことはほとんどなかったが、先生は客観的に見て不利な所から這い上がるようにする人を非常に評価されていたので、運動能力が皆無でもあきらめない私の努力を少しは認めてくださったのではないかと思う。そんなことを思い出すと、能力はともかく、あきらめずに研究を続けて、少しでも先生に近づけるように努力すれば、少しは喜んでいただけるのかもしれないと今更ながらに思う私である。石田先生、もう少しその辺にいらして、我々後進を見守っていてください。ただし、あまり急かさなないでくださいね。

先生が遺されたもの 林春吟（京都大学大学院博士課程）

私が初めて石田先生にお世話になったのは2003年の現代台湾研究学術討論会に参加したときでした。そこで、関西に台湾史研究の交流の素晴らしい場所があることに感動し、そして、その場を作ってくれたリーダーである石田先生のパワーに驚嘆しました。

石田先生は誰に対しても親切な方でした。例えば、先生はある時、台湾から日本への飛行機の中で偶然知り合った三人の台湾人大学生を、ご自分の車で桜満開の京都へ案内されたことがありました。私も先生と同じ京都に住んでいるので、修士の時から先生によく学会会場と下宿の間を車で送っていただきました。先生は運転をしながら、よく大きな新車が欲しいとおっしゃっていました。大きい車があれば、もっと多くの人を案内することができるという先生のお言葉に、深い愛情を感じました。

先生はまた身をもって台湾を愛する方でもありました。私たち台湾人は、台湾の将来に関する意見を述べることを避けてしまいがちです。というのも、意見の相違の大きい課題について、台湾人は他人との衝突を恐れているからです。先生はこれに対してよく不満を言っていました。「あなたたち台湾人が台湾の未来をはっきり言わなければ、誰が応援してくれますか」、と。先生は選挙の度に台湾に行っておられました。「私は選挙権が無いが、台湾へ応援しにいুক」と言っていました。前回の総統選挙の際には、石田先生と高雄の投票所の見学に行きました。南国の熱い太陽の下、背広のまま投票の様子を見つめる先生の姿が今でも忘れられません。

先生がこれからの台湾の発展と私たちの成長を見守って下さらないと思うと、とても悲しいです。でも、先生が遺してくれた台湾への愛情と優しさは、今後の私たちの台湾研究を支えてくれる力になると思います。

石田先生と「台湾の工業化」研究会 佐藤幸人（アジア経済研究所）

劉進慶先生に続いて、石田浩先生も逝かれた。わたしとしては、「台湾の工業化」研究会のときのメンバーを相継いで失ったことになる。とても寂しい。

「台湾の工業化」研究会はアジア経済研究所において、1987年度に実施された。その成果は1988年に、谷浦孝雄編『台湾の工業化—国際加工基地の形成—』としてまとめられ、アジア経済研究所から刊行された。石田先生はこの中で第III章第1節「農業生産構造の変化と工業化—工業化に果たした農業の役割—」を執筆されている。農業と農村の変化は工業化と表裏一体の関係にある。本の中ではたいへん重要な部分であり、充てられたページ数は最も多かった。

研究会における石田先生の役割はそれだけにとどまらなかった。当時、日本の台湾経済研究は再スタートしたばかりというよう

な状態で、専門の研究者は非常に少なかった。研究会主査の谷浦さんは本来、韓国経済が専門だったし、他のメンバーの多くも台湾経済が専門ではなかった。劉先生の追悼文でも触れたように、わたしは大学を出て2年目だった。その中で多くの台湾研究の実績を持ち、第一線で研究をされていたのは石田先生と劉先生だけだった。そういう意味で、おふたりの参加は非常に心強かった。

石田先生に研究会への参加をお願いする役目はわたしが果たしたと覚えている。谷浦さんは石田先生と面識がなかったが、わたしは現在、東外大にいる澤田ゆかりさんを通してお会いしたことがあった。ちょうど1987年3月に関西の中国近現代史研究会があり、そこでお願いした。当時、アジア経済研究所の予算が限られていたので、関東以外からおひとりしか委員としてお呼びできなかった。谷浦さんは農業・農村の変化は研究会の要と考えて、石田先生をお誘いすることを早くから決めていたようである。

今、思い返すと、あの頃の台湾経済研究はとても若々しい。その中で石田先生は大きな存在感を持たれていた。心より哀悼の意を表したい。

石田浩先生を偲んで 黄英哲(愛知大学)

私が台湾近現代史研究に志し、日本に留学に来たのは1985年のことである。以来、この20年あまりの間に、台湾研究の先駆者である王育徳先生、戴国輝先生、劉進慶先生、劉明修(伊藤潔)先生が前後してこの世を去られた。先生方の政治信念や思想信条はそれぞれ異なっていたが、私にとってはいずれも「神様」のような存在だった方々である。そしてつい6年前には、「台湾史研究会」の仲間で、私の「同世代」ともいべき中田睦子先生が亡くなった。その哀しみが癒えぬまま、今度はさらに石田浩先生急逝の報に接することになった。悲痛の極みである。

1989年、私は東京から関西の大学に転学すると同時に、ある留學生の紹介で「台湾史研究会」に入会した。同じ年、研究会に入会したのが、今はもう鬼籍の人となられた魏廷朝先生である。台湾民主運動の先駆者であった魏先生は、当時、出獄してさほど月日が経っておらず、大阪経済法科大学の招聘によって来日されていた。このころの研究会のメンバーは多くはなく、例会の参加者もほぼ10人余りで、台湾研究は今日のように注目されていなかった。関西に移ったばかりの頃の私は、意気消沈していて、将来の目標と希望を見失いかけていたのだが、そんな私を再生させてくれたのは、関西で参加した3つの研究会—「台湾史研究会」、「台湾文学研究会」、「中国文芸研究会」であった。もし、あの頃、この3つの研究会との邂逅がなければ、私の人生はどうなっていたかわからない。

関西に来たばかりの頃、私は茨木市に下宿していた。関西は私にとって未知の土地で、知己と呼べるような人もおらず、日々、孤独に苛まれていた。当時、石田先生も茨木市にお住まいだった。ある年の春節、突然先生から電話があり、年越しを先生の家でしないかというお誘いをいただいた。この時の私は、大袈裟ではなく、世界は決して私を見捨ててはいないのだと感じたものだ。先生の温かさ、日本人の温かさに触れた瞬間であり、このことは今に至るまで忘れぬ事である。

90年代の初めは、日本人研究者と台湾人研究者の往来も今ほど頻繁ではなく、しかも関西を訪れる台湾人学者は小数だった。当時、台湾人研究者の来訪があると、私はいつも石田浩先生に連絡し、一緒にもてなしをした。林美容氏を迎えて石田先生とともに百万遍で痛飲したこと、石田先生の運転で許雪姬氏とともに比叡山をドライブしたことが思い出される。私の関西での8年に及ぶ大学院生としての生活の中で、石田先生と「台湾史研究会」の例会活動は、大きな比重を占めていた。

97年に愛知大学の教員として名古屋に赴任すると、私は日本人の学生に日本語で教授するという緊張から、肉体的にも精神的にも疲労困憊し、関西の研究会から足が遠のいた。「台湾史研究会」の新入会員からすれば私はすでに幽霊会員であったろう。石田先生に何かの折りにお目にかかるたび、先生は優しく声をかけてくださった。「暇があれば、研究会の例会に出てきてください」。私はやましさでいっぱい、「はい。今後は必ず参加します」と答えたものだ。もしも叶うならば、もう一度、あの聞きなれた優しいお声で声をかけていただきたい。「暇があれば、研究会の例会に出てきてください」。

石田先生のご逝去は、日本の台湾研究にとって、否、台湾研究という学術分野にとって、大きな損失であることは、今更、私が贅言するまでもない。しかし、個人的なことをつけ加えさせていただけるならば、私が人生のどん底に居たときに会った石田先生の温かさ、そして「台湾史研究会」での先生の教えは、まさに恩恵というにふさわしいものであった。それは先生のお亡くなりになった今でも、永遠に私の胸にあるのだ。先生、どうか安らかにお休みください。

亡き石田先生を偲んで 藤原孝之(関西大学大学院博士課程・在上海日本国総領事館専門調査員)

他学部の学生であった私が、経済学部の先生のゼミに潜り込んだのはもう9年も昔で、当時留学を控え休学中の私を、「やる気のある者は拒まん。大いに議論しよう」と迎えて下さったのが先生との出会いだった。そのお人柄とバイタリティ溢れるご指導に、ゼミ生たちも負けじと発奮、先生に論破されるたびに奇妙な団結心が生まれていたように記憶している。

不安な気持ちで留学に旅立つ私を、先生は農村調査に誘って下さった。お陰で更なる不安にかられつつ大荷物と背負って聞き取り調査に同行することになったのだが、振り返るとこの時の体験もきっかけとなり、後の私の進路が切り開かれたように思う。

大学院から晴れて石田研究室の正式な学生となり、合格発表直後の2000年3月、総統選挙の取材に同行したのが私の台湾研究のスタートとなった。台湾の人々と熱く語り、サッカー場で涙していた先生のお姿が今も臉に焼きついて離れない。9年前とはすっかり様変わりした上海で、変わらない先生のお姿を偲び、思い悩んだ時には先生の教えを胸に繰り返し、発奮を試みている。

石田団長を偲んで 2003年度日台青年交流事業団員有志

団長——。私たちにとっては、「教授」よりも、「理事長」よりも、「団長」とお呼びするほうが、やはりしっくりくるような気がします。2004年3月の中華民国総統選挙。交流協会の日台青年交流事業に参加した私たちは、「緑営」の不利が伝えられるな

か、石田団長引率の下、台湾を訪れました。総統選挙にかかわる公的組織や各地の科学技術特区、さらには最期に先生が滞在されていた国立政治大学や中山大学など、様々な訪問先が用意された10日間の日程は怒涛の如く過ぎていきました。そのなかで、何よりも印象に残っていることは、一行が花蓮で民族舞踊を満喫した直後に伝えられた「陳水扁撃たれる」の一報を前に、「こりゃあ、大変なことになるでえ〜」と、興奮した面持ちで情勢分析に取り組んでおられた団長のお姿です。帰国後も私たちは同窓会を重ねました。本郷の「大福」や三田の「龍門」での同窓会、仙台で開かれたある学会の懇親会で牛タンを頬張る横顔も忘れられません。どこにいらっしゃっても大きなお声と大きなお体で「おお〜、君も来とったんか〜」と声をかけてくださる団長は、台湾での在外研究にお出かけの際にも葉書で今後の研究に向けた意気込みをしたためてお送りくださいました。団員一同は、突然の訃報をいまだに現実として受け入れられずにあります。旅での出会いを機に関東では院生研究会も発足しました。小さな研究会ではありますが、これを続けていくことで、団長の台湾・中国研究に対する熱い想いを受け継いでいきたいと思っております。

団員一同、団長のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

今井孝司（関西大学）、佐橋亮（東京大学大学院博士課程）、渥美すが子（元早稲田大学大学院）、大澤武司（中央大学大学院博士課程）、古村学（龍谷大学）、白石京子（元大阪大学学部生）、杉浦康之（慶應義塾大学大学院博士課程）、鳴海麻里（財団法人交流協会）、野田寛子（元大阪大学学部生）

さようなら、石田浩先生 圖左篤樹（関西大学大学院博士課程）

昨年10月末にお会いした際に石田浩先生にこのような文章を書くことになるとは想像もしていませんでした。私が先生に指導を仰ぐようになってからの11年は、あっという間に過ぎていったように思います。先生がゼミ説明会の壇上でアジア経済研究所所長東畑精一氏の「現地主義」の実践や毛沢東の「調査なくして発言権なし」という格言を引き合いに出し、地域研究を行うものの心得を熱心に説明されていた姿を昨日のこのよう覚えています。中国福建省安溪で農村調査をした際には、未舗装の道を片道2時間揺られた後も、日が暮れるまで何軒も農家を訪問し熱心にインタビュー調査をされていましたね。そして、宿舎へ帰っても毎日夜遅くまでいろんな事について議論をしましたね。農村調査で目を生き生きと輝かせていた先生の姿は、「関大のインディー・ジョーンズ」そのものでした。

先生に教わったことは農村調査の手法や地域研究への情熱だけではありません。学会やなどで遠くへ出かけた際には、温泉を探してよく入りに行きましたね。それまで温泉に見向きもしなかった私ですが、先生と温泉へ行くようになってすっかり温泉の虜になってしまいました。最後にお会いしたときに、「また今度台湾来たら、温泉巡りをせえへんか」と仰っておられましたが、今は叶わぬ夢となってしまいました。

入院されている際には、台湾の研究者をはじめ、先生が初めて台湾へ訪問されたときからのご友人が多数お見舞いに来られました。また、お亡くなりになられてからも、数多くの方々から先生への思いを綴ったメールをいただきました。それは先生が台湾を愛し、多くの人々に勇気と希望を与え、人知れず努力されてきたからこそであるとしみじみ思います。

先生の元気なお声が聞けないのはとても残念ですが、きっと今頃は天国でのんびりと自分のやりたい研究に勤しんでおられることと思います。先生、本当に11年間ありがとうございました。

さまざまなチャンスを与えて下さった石田先生 今井孝司（関西大学）

ともかくそのお姿を見ない限り信じられない、いや信じたくない。迫りに満ち溢れたエネルギーの塊、石田先生がいなくなるはずはない。そんな「座りの悪い気持ち」で台北の葬儀に駆けつけた。葬儀の最後にお顔を拝見しお体に近いところへ花を手向けた時も、お骨を拾ったときでさえも実感がわかかなかった。そしていまだ「座りの悪い気持ち」はおさまらない。「今井君、タイトルが長すぎや」なんて声が今にも電話口から聞こえてきそうで...

石田先生と出会ったのは1995年、中国現代史研究会総会の懇親会席上だった。当時私は日本語学校で留学生と接する傍ら、社会人大学院生として台湾の省籍矛盾をテーマに研究活動に着手していた。その頃研究に行き詰まりを感じはじめており、懇親会の場でいくつか質問をさせて頂いたところ、実に明快に（そして豪快な話し方で）お答え下さった。直ちに台湾史研究会に入会、以降先生の背中を追いかけて台湾研究を続けてきた。

石田先生からは研究に取り組む根本的な姿勢について多大な影響を受けた。とりわけ台湾社会を既存のイデオロギーや理念にとらわれずに研究をすること。それには自分の足で歩き、耳で聴き、目で観て、肌で感じる中から、研究者自身の台湾社会の確証をつかんでおくこと。また台湾社会から情報やデータなどを拝借する限り、どのような形であれ研究成果を台湾社会に還元することが研究者としての礼儀であるということなどを学んだ。

社会人を経て研究活動に入ったことから、年齢と研究歴に乖離がある私に、直接・間接的に、また適切な言葉で研究の評価をして下さり、加えて学会シンポジウムでのパネリストや国際会議での研究発表、あるいは本学会での選挙管理委員や会計監査委員任命など、さまざまな機会も与えて下さった。石田先生、本当にありがとうございました。先生から有形・無形に受け継いだものを自分に取り込み、そして後進へと伝承していく所存です。

石田浩先生の思い出 朝元照雄（九州産業大学）

1月8日の午後3時頃、森田明先生から第1報の電話を受け取った。それは石田浩先生が台湾で急性肝炎により、危篤状態であるという内容であった。石田先生は昨年12月末に倒れ、台湾大学付属病院に入院された。奥さん、お子さん、教え子の圖左篤樹君、松田吉郎先生らが前後して台湾に駆けつけられているが、病状は悲観的で、大変危ない状況であると。

この時、始めて石田先生の病状を聞いたことであり、大変驚いたのであった。あんな元気でバイタリティのある人が、まさか

そんなことになるとは夢にも思わなかった。その夜9時頃に、森田先生から第2報の電話を受けた。台湾時間7時45分（日本時間8時45分）に、石田先生は私たちを離れ、天国に行ったことを告げた。同日の10時頃に今井孝司君からも石田先生の訃聞の電話を受けた。

まさか！あんなに元気で、パワフルな石田浩先生が私たちから別れて天国に行こうとは。大変ショックであった。『日本台湾学会ニュースレター』第10号（2005年11月）に「特集 劉進慶先生追悼文集」を組んだ。石田先生は学会理事長として追悼文を寄せた（巻末に小生も追悼文を書いた）。まさか、数ヵ月後に今度は石田先生が追悼の対象になるなんて夢にも思わないことになった。石田先生は59歳で小生よりも4歳上であり、台湾史研究会の会誌『現代台湾研究』は今年に石田先生の還暦記念号を企画していたのにこれが追悼号になるのか、大きなショックである。

小生は福岡に住んでいるため、石田先生とお会いすることは数多くはなかった。昨年2回お会いした。5月のアジア政経学会西日本大会（同志社大学）で小生は分科会の司会（座長）を務め、石田先生は討論者を務めた。懇親会の後、喫茶店でコーヒーを飲みながら雑談をした。この時に昨年秋ごろから数ヵ月、台湾の政治大学に訪問教授に行くと話されていた。その理由は半ば冗談で、石田先生は関西大学では古株で、このまま大学にいと学部長として選ばれる可能性があるのでは、台湾行きを決めたと言う。そして、小生を台湾史研究会に入会するよう勧誘された。

石田先生の勧めに従って研究会のメンバーになったため、今度は今井君から電話が来て、台湾史研究会主催の第9回現代台湾学術討論会に「開会の挨拶」をしてもらえないかという依頼であった。大変光栄なことを受け入れることになり、関西大学飛鳥研究所（奈良県明日香村）で石田先生と再会した。まさか、これが石田先生との最後の機会になるとは夢にも思っていないことであった。

石田先生とはよく台湾でお会いした。そのうち、最も印象的なのは、2000年3月の台湾総統選挙時のことである。投票日（開票日）の夜、石田先生、関西大の院生と小生と一緒に楊基銓先生の家でテレビで開票の結果を見守っていた。楊先生は台湾の經濟部次長、台湾土地銀行会長、華南銀行会長を歴任した大人物で、お会いする前に氏の『台湾に生を享けて』（日本評論社、1999年）を読んだことがあって、お会いするのを楽しみにしていた。開票の進展によって、陳水扁総統候補者の得票数がうなぎ上りに増え、楊宅はワクワクした雰囲気になった。この時、民進党本部から電話が来て、楊先生は本部に出かけた。楊先生は陳水扁後援会会長を勤めていたためである。楊宅から出て、石田先生たちと一緒に民進党本部に行った。そこには陳水扁支持者が大勢集まっていた。この時、石田先生は（1949年10月1日に毛沢東が天安門に立ち上がった時の名言を真似て）「台湾人民站立起来了（台湾人民が立ち上がった）」という言葉を使った覚えがある。まさにこの瞬間を適切に表す言葉である。このように、石田先生には大変お世話になった。また、石田浩・西口清勝編『東アジア経済の構造』（青木書店、2001年）に小生は先生の誘いを受けて、共同執筆者になり、この本に小生は「東アジアの経済発展戦略」を書いた。

先生は天国で私たちの日本台湾学会および台湾史研究会を熱く見守っていてください。最後に、先生のご冥福を祈ります。

特集 台湾統一地方選挙とその後

2005年12月に実施された台湾の統一地方選挙について、台湾で選挙に触れた方々からの報告を特集として掲載する。（編集部）

2005年12月の台湾「三合一」選挙について 若畑省二（国立政治大学）

2005年12月3日に行われた台湾の統一地方選挙（いわゆる「三合一」選挙、県・省轄市長選挙、県・省轄市議会選挙、郷・鎮・県轄市長選挙の3つ）について、何か文章を書いてくれという依頼を受けたのだが、正直に言ってその期間台湾に滞在していたというだけで、メディアの報道をまめにウォッチするというのも特になかったので、選挙に関して特別な情報を提供できるわけではない。また、台湾に滞在し関心を持って勉強を始めてから1年余りほどしか経っておらず、台湾政治についての知識にも限界がある。最初からやや言い訳がましくなるが、ここでは今回の選挙についての雑駁な感想を述べるのみということをお断りしておきたい。

2004年3月の総統選挙、12月の立法院選挙、2005年5月の国民大会選挙に続き、今回の統一地方選挙はこの2年間で4回目の全国的な選挙であった。民進党と国民党の間で国民大会において討議される憲法改正の内容について既に合意があり、なおかつ純粋な比例代表制による選挙であった国民大会選挙の低調さは別としても、今回の選挙は非常に盛り上がり欠けたように思われる。1990年代以降の台湾では選挙が毎年のように行われ、政局が完全に選挙を中心にして動いている現状に対して、有権者の中で「選挙疲れ」が起こっている感がある。

今回の選挙は地方選挙であったが、位置づけとしては陳水扁政権に対する評価が問われた選挙であった。陳水扁総統や馬英九国民党主席・台北市長をはじめとした民進党・国民党の首脳たちが、各地の候補者の支援のために全国を飛び回る姿が連日報道され、地方選挙のために中央政府や台湾市政府の機能はどうなるのだろうと、部外者ながら心配にさえなった。各種地方選挙が総統任期の中間において統一的行われ、政権に対する中間評価として全国的な性格を帯びるとするのは、韓国とも類似する点である。（厳密に言うと、韓国の大統領任期が5年であるのに対し、地方首長・議会の任期は4年であり、選挙期間が重なり「中間」とは言えない場合もありうる。）選挙至上主義の政治から脱し、また地方選挙を全国的な政局から切り離して地方の事情によって争う選挙に変えるためには、選挙期間や統一実施の有無などについての制度設計に関し、再考する余地があるのではないかと考えられる。

選挙の様相は、ここ最近の選挙と同様に、「汎藍」陣営と「汎緑」陣営の全面的な対決となった。特に、親民党の若手有力立法委員であった周錫璋が国民党に籍を移して台北県長に立候補するなど、親民党あるいは台湾團結聯盟の影は非常に薄くなり、国民党と民進党の直接対決としての性格が色濃かった。その中で、民進党政権の腐敗・汚職にまつわるスキャンダルが選挙の最大の争点として浮上した。高雄市の捷運建設におけるタイ人労働者の暴動に端を発したスキャンダルは、次々と拡大していき陳水扁総統の側近が起訴されるまでに至った。一連のスキャンダルは、元来清廉を売り物にしてきた民進党のイメージを大きく傷つけ、台湾海峡兩岸関係の停滞や経済の不振などによる陳水扁政権の業績に対する厳しい評価と相まって、民進党の候補には強い逆風が吹くこととなった。今回の県・市長選挙には、民進党は羅文嘉・林佳龍など民主化期に学生運動を担った世代の若手有望

株を積極的に立候補させたが、清新なイメージを有権者に与えるには至らず、むしろ陳水扁政権に対する厳しい評価の影響をもろに受けるだけであった。

他方国民党は、2005年7月の主席選挙で国民の人気の高い馬英九台北市長が主席に選出され、民進党の失点もあって相対的に士気が高かったといえる。選挙戦の中で個人的に大変印象深かったのは、選挙戦における「汎藍」陣営による街頭示威活動である。台北市では選挙が行われず、また前述したように選挙の盛り上がりも欠けていたので、台北市内では選挙集会を見かけることが少なかったが、それでも選挙が近づくにつれ台北市内でも各陣営による大型の動員が行われるようになった。その中でも、選挙直前の日曜日を利用して行われた「汎藍」陣営の集会は、多数の動員に成功し非常に盛り上がった。2005年3月に行われた中国の反国家分裂法に反対するデモをはじめとして、大型の政治的な動員は「汎緑」陣営の「専売特許」であるという固定観念を持っていたのであるが、今回の選挙は「汎藍」陣営の方がむしろ大規模な政治的動員を行っていた印象が強い。この点からも、民進党に対する逆風・国民党に対する追い風を感じ取ることができた。

選挙の結果は、周知の通り民進党の大敗であった。県・市長を例にとると、民進党は羅文嘉・林佳龍がそれぞれ出馬した台北県・台中市など注目の選挙で軒並み敗北し、確保した首長の数は6にとどまって、前回の9から大幅に後退した。一方、国民党は前回の9から14へと大幅に躍進し、民進党が長年政権を維持してきた宜蘭県・嘉義市などでも勝利した。全体の印象としては、国民党が積極的な戦術を打ち出して勝利したというよりも、民進党が自らのスキャンダルによって自滅したという感が強い。実際に、個々の政策・政見や候補者の資質などが選挙で争われることは少なく、民進党のスキャンダルに対する攻撃とそれに対する反撃というネガティブ・キャンペーンの応酬で彩られた選挙戦であった。

県・市長の選挙結果を地域という観点から見ると、非常にくっきりと「南緑北藍」の情勢が現われた。すなわち、台湾本島北部・中部・東部と外島の各県・市長を全て「汎藍」が席卷したのに対し、雲林県以南の各県・市長は嘉義市を除いて「汎緑」が占めることとなった。このような地域によって有権者の投票行動・各政党の得票の構図が大きく異なる現象は、民主化後の韓国でも濃厚に観察されるところである。選挙における政治的対立軸が、経済社会的な問題ではなくアイデンティティや分裂国家との関係など既存の政治体制の枠内では容易に解決不能な問題をめぐって形成され、なおかつその対立軸が居住地域をはじめとする社会的属性と密接に関係しているという特徴を、台湾と韓国は共有している。以前の台湾の選挙でもこのような「南緑北藍」の現象は指摘されてきたが、決して偶発的なものではなく、今後も台湾の選挙政治における大きな特徴として注意していくべきであろう。

なお県・市長選挙以外の、県・市議会選挙、郷・鎮・県轄市長選挙においても、国民党がやはり圧倒的な強さを見せた。前回と比べ、民進党もこれらの選挙で善戦したものの、県・市議会選挙では国民党の獲得議席の2分の1に満たず、郷・鎮・県轄市長選挙では5分の1にさえ届かなかった。2000年に与野党間の政権交代が実現してから、民進党も地方への浸透を強めているというものの、農村地域や地方小都市では国民党が相変わらず組織的な根強さを有していると考えられる。

ところで、県・省轄市長選挙、県・省轄市議会選挙、郷・鎮・県轄市長選挙の3つの地方選挙が統一行的に行われるのは今回が初めてであったが、それがどのような効果を持ったのかという点は、政治学的に興味深い。ある見方として、議会選挙や農村地域での選挙は国民党が強く、また台湾の有権者は分割投票に慣れておらず各層の選挙で同一政党に投票する傾向があるので、各層の選挙を統一行的に行うのは国民党に有利であるという仮説がありうるが、この見方は説得力が高いように思われる。各種の選挙をまとめて行うのは効率や経費の観点から考えて合理的であるが、このような決定を行った民進党にかえって不利に働いたというのは、やや皮肉なことである。

今回の選挙結果が今後の政治にどのような影響を与えるのかという点については、色々な解釈が可能であろう。民主化後の選挙政治について、長期的な趨勢の観点から一つ言えるのは、2004年12月の立法院選挙と今回の統一地方選挙の結果から見て、「汎藍」支持の長期的な凋落・「汎緑」支持の段階的な成長には、ある種の歯止めがかかったように見えるという点である。ただし、これが近年の「汎藍」「汎緑」間の分極的対立にどのような影響を与えるかは、全く未知数である。立法院の多数を利用した行政府に対する執拗な「ハラスメント」は、「汎藍」の危機意識がある程度和らいだことによって緩和されるかもしれないし、あるいは逆により勢いづいて対決姿勢をさらに鮮明にするかもしれない。また民進党の側も、これまでの態度を改めて「汎藍」との協調路線に転じるかもしれないし、あるいは逆にイデオロギー的な支持を固めるためにより非妥協的な態度を打ち出すかもしれない。いずれも、これからの観察を必要とするであろう。

国民党は、2008年総統選挙における有力候補となるであろう馬英九主席を擁し、今後2006年台北・高雄市長選挙、2007年立法院選挙、2008年総統選挙と続く政局において、まずは有利な地歩を固めたといえるであろう。一方、民進党についていうと、今回の選挙を通じて明らかになったのは、支持者内部における民進党政権に対する不満の高さである。不満の原因は、腐敗・汚職に対する失望以外に、陳水扁政権が当初掲げた政策がどれも十分に貫徹されていないことがあるように思われる。今後、陳水扁政権が次第にレームダック化していくことが避けられない情勢の中で、いかにして党内の権力闘争・不協和音を纏め上げ新たな求心点を創出していかは、民進党にとって大きな試練となるであろう。しかし、選挙後責任をとって党主席を辞職した蘇貞昌が行政院長に横滑りし、党主席選挙では行政院長・総統府秘書長を歴任し陳水扁総統の支持を受けた游錫堃が選出されたことを見ても、陳水扁が超然的な立場に立ち蘇貞昌・游錫堃・謝長廷・呂秀蓮の四者が2008年総統選挙へ向けてしのぎを削るという民進党内の権力闘争の構図には、それほど大きな変化が生じていないのかもしれない。2008年総統選挙に向けては、これからまだまだ幾つかの波乱・変動が待ち受けているというべきであろう。

統一地方選挙後の台湾の対中国政策 —基本教義路線への回帰?— 石原忠浩 (国立政治大学東亜研究所博士)

1. はじめに

2005年12月に行われた統一地方選挙で、与党民進党は惨敗した。台湾の過去の選挙では、兩岸関係は重要な 이슈となってきた。しかし、今回の選挙では、兩岸関係は重要な 이슈にはならず、馬英九国民党主席の言葉を借りれば「民進党が自分(の失政)に敗れた選挙」であった。しかし、その一方で台湾当局の選挙後の兩岸関係がどのような方向に進むかについては、選挙前から大きな関心が持たれていた。馬英九主席は、選挙直前の11月29日に今選挙で民進党が大敗すれば、陳水扁総統は兩岸政策を大幅に修正する可能性があるかと予測した。これに対し、陳総統は翌30日、野党が勝利すれば兩岸政策はより保守的になり、開放に向かうことはないかと反論した。選挙敗北後の陳総統の動向に注目が集まったが、陳総統は数日間メディアの前から姿を消

し、様々な憶測が流れた。その間、中国大陸事務を統括する行政院大陸委員会の高官から、大陸政策に変化はないとの発言が報じられたことで、毎年重要な政策方針が表明される総統の元旦談話では開放的な兩岸政策を発表するのではないかと期待が広がった。しかし、元旦談話の内容は、台湾主体意識（アイデンティティ）を強調したものとなった。兩岸関係に関しては、経済貿易政策を従来の「積極開放、有効管理」から「積極管理、有効開放」に転換する旨表明されたことが注目を集めた。更に、1月29日の春節談話では、陳総統自身が2000年5月の就任時に内外に向けて保証した「四つのノー、一つのない」（注：「独立宣言をしない」、「国名を変更しない」、「『二国論』を憲法に盛り込まない」、「統一か独立かを問う公民投票を実施しない」、「国家統一委員会・国家統一綱領を廃止しない」）のうちの、「一つのない」に関わる国家統一委員会と国家統一綱領の廃止（「廃統」）を検討していると表明し、大きな波紋を呼ぶこととなった。ここでは、選挙後の台湾当局の兩岸政策の変化として注目される、「廃統」をめぐる動きと、政策変更の背景について私見を述べてみたい。

2. 国家統一委員会の廃止をめぐる動き

1月29日（農曆の1月1日）、陳総統は、国民党政権時代に総統府内に設置され兩岸統一政策方針の諮問機関であった「国家統一委員会」と兩岸関係の指導的綱領となっていた「国家統一綱領」の廃止（「廃統」）の検討を表明した。陳総統は「廃統」を検討する理由として、「国統会」と「国統綱領」は、名前だけの存在になっており、統一を前提とした当時の政策方針は、現在の台湾の民意に合致しておらず適切に処理をする必要があると強調した。その後、大陸委員会は、補足する形で、中国が台湾に武力行使する意図が無いという前提においてのみ、「四つのノー、一つのない」の保証は有効であるとの見解を示し、現在中国の台湾に対する脅威と圧力は増しており、2000年5月に「四つのノー、一つのない」を提出した当時の前提は崩れつつあるとの見方を示した。内外から懸念の声があがる中、2月中旬には、米政府高官が秘密裏に訪台し、米は台湾に対し、「廃統」を止めるよう説得を試みたが、陳総統に拒絶され失敗したと当地新聞には報じられた。その後、米台間は「廃統」の処理方法につき水面下で交渉を続け、2月27日、陳総統は国家安全ハイレベル会議において、「国統会」は運用を停止し（英文："cease to function"、中文：終止運作）、「国統綱領」は適用を停止（英文："cease to apply"、中文：終止適用）とする決定を下した。また陳総統は、同談話において「四つのノー」については直接言及しなかったものの、今回の措置は「兩岸の現状を変える意図はない」、「憲法改正は既定の手続きに従って行う」と述べるなど、実質上の「四つのノー」の保証を再確認した。

3. 政策変更の背景

2006年に入り、陳総統は兩岸政策において大きな決断を下した。経済貿易政策の調整については、昨年度より既に進められていた措置であったことから、衝撃は大きくなかったが、「終統」に関しては、突然のことであり、野党及び中国が強く反発しただけでなく、米からも強い関心が寄せられた。陳総統が、野党との和解路線に別れを告げ、兩岸関係の緊張を高め、米台間の信頼関係を損なってまで、大陸政策の転換を図った理由は、何であったのであろうか。

2004年の立法委員選挙の敗北を受け、陳総統は2005年の元旦に与野党の和解・協力を呼びかけた。その成果として、2月に宋楚瑜親民党主席との間で兩岸政策を中心とする10項目（「四つのノー、一つのない」の再確認を含む）で合意に達し、中国に対しても和解を求める路線を推進する決意を示した。その後、4-5月にかけて国民党、親民党代表団が訪中し、胡錦濤主席と会談し、台湾では「中国ブーム」という現象が一時起こったが、その間も、陳総統は一貫して胡錦濤主席との首脳会談を呼びかけるなど、中国と和解を求める立場を堅持した。しかし、中国側が「一つの中国」政策の受け入れを兩岸対話再開の前提条件としたため、首脳会談どころか、兩岸の正式な対話ルートである海基会と海協会の対話さえ再開されることはなかった。この間、与党陣営内の「深緑」勢力と呼ばれる急進独立派は、陳総統の兩岸政策が曖昧であることに、苛立ちを感じるようになっていた。また、自滅したとはいえ県市長選挙で民進党が惨敗したことは、2005年に陳総統が推進しようとした「和解路線」が、失敗に終わった象徴的なことだったのかもしれない。更に言えば、この1年で従来の支持者ですら民進党に背を向けるようになり、民進党と陳総統の支持率が下降していったことは皮肉なことであった。かかる経緯が、台湾の指導者を従来の基本教義路線へと回帰させたと推測するのは単純すぎるであろう。

一般的に、陳総統が基本教義路線への回帰を決断した理由として、①党内政治的には、自らのレームダック化を防ぎ、求心力を高める狙い。②野党との関係においては、基本教義路線に回帰することで、低迷する支持を再浮上させる。特に、馬英九国民党主席が「国民党の兩岸政策の最終的な目標は統一である」と発言したことに対し、陳総統は「国民党は台湾独立に反対する統一派」であると定義する一方、「民進党は台湾の将来は、人民の自由な選択により決定されるべきであり、如何なる選択肢も排除しない」との立場を主張することで、両党の兩岸政策における差別化をはかる狙い。③中国との関係においては、台湾で対中国関係を主導するのは、国民党や親民党ではなく、政権与党である民進党であることを強調し、主導権を奪回し、受動から攻勢へと転じる目的などが挙げられているが、現時点ではその是非を判断できるまでには至っていない。

4. 今後の展望：2008年に向けて

馬英九主席は3月中旬から下旬まで訪米し、ゼーリック國務副長官をはじめ要人と会見をこなした他、母校のハーバード大などで流暢な英語によるスピーチ、座談会を多数こなし、2008年次期総統選挙の国民党の有力候補であることを強烈にアピールした。

一方、民進党は陳総統がレームダック化の危機に陥りながらも、依然として絶大な影響力を保ちつつ、蘇貞昌、呂秀蓮、游錫堃、謝長廷の「四大天王」が派閥闘争を巻き込みながら、候補者争いレースを展開していくものと思われる。次期総統選挙までの2年間、4人の中で誰が総統候補の座を勝ち取るのかは、現時点では不明だが、いずれにせよ、民進党の総統候補は、中国との共存や和解を求める穏健な路線ではなく、陳総統が敷いた台湾意識を前面に押し出した基本教義路線を踏襲し、国民党との差別化はかりつつ有権者に訴えていく可能性が高いであろう。

台湾統一地方選挙について

川島 真（北海道大学）

この原稿を書き進めている2006年3月、昨年12月の統一地方選挙は、選挙後すでにさまざまな政治的応酬がなされてきたためであろうか、既に過去のもののようにさえ感じる。だが、この選挙で国民党が勝利したことで、台湾の政局は2008年の総統選挙に向けて新たなステージにはいったといえ、その新たなステージの上で現在の政治が動いていることを考えれば、統一地方選挙の影響は大きいと言わねばなるまい。

今回の選挙は、2000年以後の総統選挙における民進党の勝利が、「王朝交代」ではなく、台湾政治の「民主化」なのであり、国民党が政権を取り戻すことも有りえる、ということを示した。もともと、民進党は地方の地盤が弱い。だからこそ、組織選挙というよりも、アイデンティティ・ポリティクスを繰り返してきた。民進党は、着実に支持者を増やし、得票も増

加してきているが、それでも地方に於ける国民党の地盤を崩すことは相当困難である。また、そうした地方の政治基盤と深く関わる立法院委員選挙で常に苦戦を強いられ、結果として立法院で過半数を占められないというのも、2000年の総統選に勝利して「しまい」、「与党となってしまった」民進党の辛いところである。

今回、民進党の不利は、10月下旬から露呈されていた。台湾の選挙は結果を見るまで分らないというのが、これまでの選挙観察の経験則だが、今回の民進党の追い上げには限界があった。途中、民進党側にも相当な焦りがあったようで、敗北後のシミュレーションをするような方向性もあった。今回の敗北は、党内分裂、陳水扁政権への信任問題、相次ぐスキャンダル・汚職、台聯との調整不足など、数多くの理由があるが、同時に国民党側の勝因、また民進党が根本的に不利である地方選挙であったということも念頭に置かねばならない。

今回の選挙の結果、2006年に予定されている台北市、高雄市選挙は国民党が有利となり、また再来年の立法院選挙でも地方社会の首班を多く占めた国民党が有利となることが予想される。

国民党の勝因については、2008年の総統選挙に向け、政党として新たなリーダーを選び、旧世代を「汚職」「親中」などともに切り捨て、逆にスキャンダルを民進党に浴びせかけたことにある。「新しさ」「クリーンさ」は民進党よりも国民党側にあったのである。むしろ、強固な地方組織が重要なことは言うまでもない。

選挙の結果は、民進党内部への大きな揺さ振りとなり、実際、組織、人事の調整が進んだ。また、民進党は国民党に対して軍事安全保障、アイデンティティ、対中政策などにおいて、揺さぶりをかけている。国民党は、対外政策や党産整理を進めながら、2008年に備えている。対外政策では、親中的と思われぬようにしつつ、「弱点」を克服しながら、台湾のマジョリティの代表者だという姿勢を示すことになろう。中国との関係を急速に改善しようなどとしたら、今回は収まっていた省籍矛盾、アイデンティティに火がつき、国民党に不利となる。

1. 世代交代と二大政党制への移行

今回の選挙は、連戦はもちろんのことだが、宋楚瑜の親国民党および李登輝の台聯の大幅な後退を印象付けた。世代交代が進行する中で、この両カリスマの政治力に限界が生じたことが大きい（実は選挙に強い筈の陳水扁もまた、その政治力に限界が生じていることを印象付けた）。李登輝の台聯は、民進党との協力関係に問題が発生する中で、キャスティング・ボードも握ることができなかった（それに比べて親国民党と国民党の協力体制は強固であった）。二大政党の得票数が拮抗する総統選挙においては、少数政党の数パーセントの票がキャスティング・ボードを握ることがあろうが、統一地方選、台北・高雄市長選、立法院選挙では厳しい。今後の2年間で、国民党と民進党の二大政党制的な色彩が強くなるだろう。

2. 選挙の争点

ある意味で、現在の民進党政権に対する信任選挙としての面が強かったように思える。その民進党は、従来、省籍矛盾、アイデンティティ問題に焦点を絞りながら選挙をおこなってきた。今回は5月に連戦、宋楚瑜が訪中し、帰国後、彼らに非難が殺到した。その点では、民進党に利点があった。だが、その非難をリソースとしたのは馬英九の国民党であった。逆に、この半年間、陳水扁政権は議会運営の面でも、国際政治的な側面からの抑制により何もできない状態にあり、大陸政策にしても、国内の政策にしても、何もすることができなかった。経済は低迷し、国民のストレスは高まっていた。他方、陳哲男案などの汚職問題が相次いで暴露され、非常光碟案があり、最後には台北県長候補である羅文嘉の不正疑惑がおきるなど、従来の「民主」「クリーン」イメージを民進党自身が放棄するような格好となった。加えて、そうしたネガティブ・キャンペーンを押し戻す力が、いまの民進党にも、陳水扁にもなかったのである。党内の結束も弱かったし、またアイデンティティ・ポリティクスがまったく機能しない状態にあった。民進党支持者でさえも、今回は民進党に「教訓」を与えようとした面があった。

3. 連戦・宋楚瑜の訪中との断絶性

今回の選挙は決して5月の連戦、宋楚瑜による訪中の連続性の下に語られるべきものではなく、むしろ両者の路線を否定した上で、あらためて新党首である馬英九をたて、2008年への道程を明確に示した国民党が、連戦らをスケープゴートにして、大陸との関係や統独問題、またアイデンティティ問題に触れない状態で、民進党の腐敗と問題を糾弾しつつ得た勝利だということを強調しておきたい。日本のメディアの中には、5月の延長上にこの勝利を位置づけ、すぐに大陸政策との関連で今回の選挙を位置づけ、連宋の訪中が支持され続けているという方向で分析しようとするが、それはミス・リーディングではないかと思っている。

4. 中国・アメリカとの関係

今回の選挙の間、中国のメディアは当然民進党に対して批判気味に報じていたが、キャンペーンをはったということまでいってはいない。結果についても、台湾独立と政治腐敗の双方を攻撃し、2008年はこれで馬になる、という方向で報じてはいるが、総じて「静観」したと喋っている（地方選挙であったということも静観の理由だろう）。これが馬英九ら国民党を後押しした。民進党にアイデンティティ・ポリティクスをおこなう隙をあたえなかった。

選挙の結果を受け、中国あるいは共産党が果たして今後も台湾政治に対する静観を継続できるかどうかの問題だ。中国が馬英九を支持しているという姿勢を示せば示すほど馬は台湾内部で支持を失うだろう。今後、国民党と民進党は、今後相手がいかにかマイノリティであるか、いかに非現実的な統一派／急進独立派であるかを示し、逆に自らがいかにか「現状維持」＝マジョリティを代表しているかを示すことを示すべく、問題提起のキャッチボールを続けていくことになろう。『自由時報』の国民党の広告記事、安全保障問題をめぐる応酬などが既に見られている。

アメリカについては、武器購入の件が大きな問題となるが、馬英九の訪米などにより、その問題を解決し、立法院を通過させれば、馬英九にとっても大きな追い風となる。馬は、今後、現政権の対外関係の失敗を補うように、東南アジアなどとの関係を改善していくことになろう。日本については、いろいろな言われ方をしているが、継続的な観察が必要である。

5. 現政権への不信任と民進党の再編課題

現政権にとって、議会運営が十分にできず、あらゆる政策が立法院で否決される可能性のある状況にあることが大きな問題である。これは新制度の下での最初の選挙となる来年の立法院委員選挙まで続くことになる。今後、今回の「教訓」を受け止め、どう改善するのかが問われている。民進党では、陳水扁の求心力が失われ、ポスト陳について模索状態のまま、来年、再来年の方向付けをしなければならない。もはやアンチ・国民党とアイデンティティ・シンボルだけでは、党の結束には限界がある。民進党自身のアイデンティティの再構築が求められる。世代交代を含めた党内調整が迫られている。

6. 基層選挙と地域格差

国民党が地方派系の再編に比較的成功し、民進党はその地方地盤の脆弱さを露呈した。総統選挙で濁水溪を超えた民進党も、基層選挙ではまだ「北伐」は成っていない。地図を見れば、台湾の西南部が「緑」であり、他は「藍」となっている。特に客家地域での敗北、宜蘭での敗北の影響は大きい。他方、台北県での敗北は今後2年間の選挙に大きく影響することになる。これを

いかにカバーするかが問題となる。

他方、縣市以下の市鎮および議会での動向も無視はできない。ここでは、親民党らのポストを国民党、民進党両党が奪い合う格好となり、実は割合では民進党が議席を伸ばしているのである。これを、基層社会においても、民進党が着実に支持基盤を強固にしつつある、と見るべきなのか、まだ結論は出せない。しかし、それでも総体的には、基層社会では国民党有利であり、民進党が強い高雄県でさえ、市鎮の首班は国民党のほうが多いということを見過してはならないだろう。

台北定例研究会のあゆみ 永吉美幸（国立台湾大学大学院）

日本台湾学会台北定例研究会は、佐藤幸人会員（アジア経済研究所）、何義麟会員（台北教育大学）、陳培豊会員（成功大学）らが中心となって2001年夏に発足したものである。早いもので2006年2月現在までの4年半で、開催した定例研究会は合計35回を数える。佐藤幸人会員の帰国に伴い、第19回からは陳培豊会員が責任者となり、また陳会員の成功大学への赴任に伴って、第29回以降は富田哲会員（淡江大学）が責任者を担当している。連絡係については、第1回から第5回まで山崎直也会員（国際教養大学）が担当し、山崎会員の帰国後は永吉がこれを受け継いで現在に至っている。

台北定例研究会は、台湾研究に従事する在台的日本人研究者や日本人留学生、そして台湾人研究者が交流を深め、また切磋琢磨するための場所を提供するという発足当初の理念を、現在も変わらず持ち続けている。在台的日本人の勉強会という小さな枠にとどまるものではないがために、実際の運営において大小様々な問題に突き当たることも少なくない。今回、この場を借りて台北定例研究会の4年半のあゆみを振り返り、当会が実際に台湾研究を主軸とした日台交流の場として機能しているのかどうか、現状と照らし合わせて考えてみたい。

合計35回の定例研究会のうち報告者（またはパネラー）を担当して下さった方は延べ37名、うち日本人が28名、台湾人が9名であった。使用言語別に見ると、日本語の使用が22回、北京語が13回である（ただし、日本語と中国語の使用が半々のこともあり、厳密な統計ではない）。さらにそのうち、台湾人の報告者が日本語で行った報告は3回、逆に日本人が北京語で行った報告は6回であった。

まず、報告者の比率から見ると、日本人28名に対して台湾人9名というのはやや不均等な数字であるように見える。しかし、台湾に住む台湾人研究者にとってみれば、報告の機会を与えられる場所はなにも当研究会だけというわけではなく、一方、日本人研究者にとって当研究会は、異国の地にありながら研究内容を母国語で伝えることができる貴重な場であるため、日本人の報告者のほうが多くなるのは自然の結果だと思われる。

報告者が台湾人か日本人かというより、重要なのはむしろ使用言語のほうである。台北定例研究会は、在台的日本人のための勉強会という趣旨のみで作られたのではないため、日台交流という目的を考えれば、使用言語が偏りすぎることは好ましくない。日本語の使用が続けば、参加者が日本人に偏りがちで、また日本にある勉強会と大差がなくなってしまう。一方、北京語の使用が続けば、北京語が不得手な日本人研究者の足が遠のいてしまし、逆のケースもありうる。このため、使用言語が偏らないようにすることは、報告のスケジュールを調整する上で、留意しなければならない重要なポイントとなっている。こうした反省もあり、第12回から日本人研究者が北京語で報告を行うという試みが始まり、それ以降、これまでに北京語で報告を行った日本人研究者は6名に上っている。つまり、日本人報告者が台湾人報告者を上回るという現象を、北京語の使用を増やすことでカバーしたのである。その結果、たとえ報告者が日本人であっても参加者が日本人に偏ることがなくなり、それは参加者の顔ぶれからも明らかに見て取れるようになった。

しかし、これだけで台北定例研究会がその機能を十分に果たしているとは言いがたい。例えば在台的日本人研究者に限って言えば、普段、北京語で報告したり論文を書いたりする機会が多いため、台湾にいても日本語で報告できる場所として台北定例研究会が機能できれば、より理想的ではないかと思う。このほか、在台的台湾人研究者については、日本で報告する必要がある場合などに、事前に台北定例研究会で日本語を使って報告を行って反応をみるなど、台北定例研究会が担うことのできる役割はまだ多いと思う。

台北定例研究会を学术交流の場としてとらえる場合、もう1つ力を入れなければならないと思うことがある。それは、日本人留学生の参加呼び掛けである。近年、台湾の大学や大学院に在籍する日本人留学生は増加の一途をたどっている。しかし、自身が台湾の大学院に身を置きながら実感することは、台湾では日本人留学生の交流がほとんど行われていないということである。日本人留学生にとって留学の最大の目的は、台湾で生活しながら台湾人と触れ合い、そして台湾への理解を深めることにある。しかしながら、その過程で先達である日本人研究者との接触の機会を持つことができれば、その後の進学や研究への志を大きく左右することにもなり、さらに大きな収穫を得ることができるのではないかと思う。こうしたことも、台北定例研究会が担うべき役割の1つであろう。

台北定例研究会の参加者は、毎回15～20人程度である。研究会が終わったあとは、付近の食堂で食卓を囲んで一杯、というのが恒例となっている。食卓を囲んでいるうちに研究会での議論がさらに盛り上がることもしばしばある。こうした機会を、台湾にいながら1～2ヵ月に1度のペースで設けることができるのは非常に貴重なことである。これも何義麟会員が毎回のよう、勤務先の台北教育大学（旧・国立台北師範学院）の教室を手配してくださるおかげである。台北定例研究会では今後、台北市内の別の場所での開催や、台北以外の場所での開催なども検討しており、より多くの方々に参加の機会を提供したいと考えている。

台北定例研究会に興味をお持ちの方は、ぜひ当方にご連絡いただきたい。メールアドレスをお知らせいただければ、こちらから定例研究会の案内をメールで通知させていただく。また、日本での研究・留学を終えて台湾へ帰国する台湾人研究者や、研究・留学のために台湾に滞在する予定の日本人研究者の方々にも台北定例研究会に顔を出していただければ幸いである。

関西部会研究大会報告 やまだあつし（名古屋市立大学）

日本台湾学会第3回関西部会研究大会は、台湾史研究会との共催により、2005年11月19日に、名古屋市立大学・山の畑キャンパスの人文社会学部棟2階203教室で開催されました。報告は、以下のとおりでした。

- ・佐藤和美（関西学院大学大学院）
台湾民進党政権の外交－「人権外交」と「民主外交」の意義と制約－
コメンテータ 吉村剛史（サンケイ新聞大阪本社・夕刊フジ関西総局編集部）
- ・許時嘉（名古屋大学大学院）
「国語」の機能化と植民地台湾人－国語としての日本語から言語としての日本語へ－
コメンテータ 下村作次郎（天理大学）
- ・唐顯芸（神戸大学大学院）
翻訳の隙間からこぼれたもの－楊雲萍の『山河』について－
コメンテータ 澤井律之（京都光華女子大学）
- ・やまだあつし（名古屋市立大学）
佐久間総督時代の「理蕃」官僚について
コメンテータ 河原林直人（龍谷大学）
- ・山本和行（京都大学大学院）
日本統治直後台湾の教育事業と教育官僚－国家教育社との関係を中心に－
コメンテータ 松田吉郎（兵庫教育大学）

11月という他の学会も多い時期で、かつ名古屋という関西圏から離れた場所での開催にもかかわらず、30名余の参加を得て、活気のある研究大会とすることができました。また報告も新進気鋭の院生による興味深い内容が多かったように思います。末尾になりますが、参加者の皆様、報告者の皆様、ありがとうございました。

学会・シンポジウム等参加記

台湾原住民文学初の 国際シンポジウム開催される 山海の文学世界 －台湾原住民族文学国際研究会－ 下村作次郎（天理大学）

2005年9月2日から4日まで、花蓮市の花蓮中信飯店で「山海の文学世界－台湾原住民族文学国際研究会」が開催された。これは、台湾原住民文学に関する世界初の国際シンポジウムである。主催者は、台湾原住民族文化発展協会・山海文化雑誌社および国立東華大学原住民族学院民族語言与傳播学系であった。

今回のシンポジウムでは、27本の論文が発表される予定であった。参加学者は、台湾在住学者以外に、アメリカ、カナダ、オーストラリア、中国の内蒙古自治区から参加が予定され、日本からは6名が参加した。

実は、大会前の8月31日から9月1日まで、超大型の台風（泰莉台風 日本では台湾13号）が台湾の東海岸を襲っていた。筆者は、台湾原住民文学に関する科研の調査で、31日から『サヨンの鐘』の舞台である南澳に出かけ、その日の夕刻から激しくなる一方の台風にも震えながら、南澳溪南溪に散ったサヨン・ハヨンが経験した台風もかくなるものかと追想していた。この台風は、三千メートル級の中央山脈にぶつかり、二つに割れて、まる一日かけて山脈を越え、台湾を横断して中国大陸へ去っていった。このような超大型といわれたすさまじい台風のあとなので、大会開催が危ぶまれたが、しかしそこは台湾の魔力、なんと翌日の午後には、参加者が続々と大会の会場となった中信飯店に集まってきて、最終的には、半日遅れで予定のスケジュールはほとんどこなしてしまった。

全部で9セッションにわかれて行われた会議の主題は、次の通りである。

第一場：台湾原住民文学与台湾文学

（主持人：林瑞明）

第二場：台湾原住民文学与民族運動

（主持人：呂興昌）

第三場：口伝文学（一）（主持人：陳萬益）

第四場：口伝文学（二）（主持人：曾建次）

第五場：台湾原住民文学之翻譯与出版

（主持人：楊南郡）

第六場：原住民作家個論（一）

（主持人：陳芳明）

第七場：原住民文学的桂冠：創作經驗分享与座談（主持人：孫大川／林志興）

第八場：原住民作家個論（二）（主持人：舞鶴）

第九場：台湾原住民文学的國際對話

（主持人：廖炳惠）

多数の発表者のなかで、内蒙古自治区的那順は、「緑浪与碧波同為大海景觀」と題して内蒙古における台湾原住民文学について発表し、オーストラリアのShuhwa Wuは「Australian Female Indigenous Life Narrative: Some Case Studies」と題して、オーストラリアの女性先住民族について語った。Sam Watsonは「WHITE LIES / BLACK TRUTH」のテーマで報告。さらに、カナダ・アメリカから参加予定だった発表予定原稿は、次の通りである。Charles Beaupre 「Indigenous Literature of Atlantic Canada: An Overview」、Terry Russell 「Indigenous Literature and the Mainstream: Parallel Streams or Branches of the Same」、Jackie Huggin 「Writing Auntie Rita」。

日本から参加した、山本春樹は「伝統文化と現代文化」と題して、台湾とインドネシアの場合を比較して論じ、下村作次郎は「日本における台湾原住民文学研究」について、翻訳・出版と書評を中心に紹介、草風館の内川千裕は、アイヌ文学と比較して

台湾原住民文学の出版状況について説明した。さらに、紙村徹は「台湾女人社と東南アジアオセアニアの女人島台湾山地的女人社伝説」について発表、魚住悦子は「シャマン・ラポガンの文学における海と山」について作品論を展開し、野田正彰は「台湾原住民文学への期待」について語り、とりわけシャマン・ラポガンの「黒い胸びれ」について、今後の台湾原住民文学の発展が期待できる作品として高く評価した。新井・リンダ・かおりは、アイヌ民族の立場から「『アイヌ文学』とは何のことか」について発表した。筆者はこの新井さんの発表に衝撃を受けた。つまり、新井さんは、発表の終わりに、「アイヌによって担われる文学がアイヌ文学であるとするならば、アイヌがカムアウトできる世の中にならなければ、担い手が現れにくいということが言える。」と述べた言葉である。いかにわれわれのアイヌ民族への差別と抑圧がひどかったか、そして、そうしたわれわれが作りだした状況はいかに変わっていないかが、改めて感じさせられて衝撃を受けた。台湾原住民文学の今後は、アイヌ文学にとってきわめて大切な文学である。今後はいっそう、世界の先住民族文学との比較研究が必要である。

3日の夜の第七場では、孫大川と林志興（二人ともプユマ族）が、「原住民文学的桂冠：創作経験分享与座談」を主催し、いま原住民文学の創作に従事している原住民作家たちが多数集まり、自作の詩や小説について、さらに創作の苦悩についてさまざまな発言を行った。参加者は、陳英雄、胡徳夫、リポック、ワリス・ノカン、シャマン・ラポガン、リムイ・アキ、マサオ・アキ、パイツ・ムクナナ、ブクン、パタイ、ネコツ・ソクルマン、イパオ、アダオ、黒帯・巴代ほかである。

最後の日には、主催者の孫大川先生の案内で、みなバスに乗り、東華大学校内、池南（鯉魚潭、玉山神学院）を案内していただき、その後名残を惜しみながら散会となった。

日本台湾学会活動状況

I 理事会

【第4期理事会常任理事会第2回会議議事録】

(抄)

日時：2005年11月26日

場所：東大駒場キャンパス18号館4Fコラボレーションルーム2

1、劉進慶氏逝去に伴い、追悼文をニュースレターに掲載。また、若林理事より追悼電報を送る。偲ぶ会には石田理事長を代理して佐藤理事が出席予定。

2、2005年11月19日（土）に開催された第三回関西西部会研究大会への参加者は31名。

前回より若干増加。各分野から5本の発表があり、充実した大会となった。

3、戦後日本における台湾関係文献目録：2005年9月14日現在の目録数は6104件

4、企画委員会より第八回学術大会分科会企画・自由論題について提案される。

(1) 4件の分科会企画に対して採用4件。7件の自由論題応募に対して採用6件。

(2) 松永学術大会実行委員長により今回は企画を出さないことが提案され了承。

(3) 記念講演は、理事長案の張勝彦国立台北大学歴史系教授兼民俗芸術研究所所長の「戦後台湾における台湾研究についてー台湾史研究を中心として」(仮)を承認。講演は、日本語で行われる。

(4) 台湾からの招聘者は記念講演を含めて計4名。交流協会からの渡航費補助は3名までとなっているので、速やかに川上会計財務担当理事より交流協会へ連絡をする。

5、新会員の入会について：7件。当日5名を承認。2名については、研究内容、関心事項について具体的に記した書類の提出を事務局より要求。後日、持ち回り理事会で承認。

6、4年間学会費未納者：18件。

7、次回常任理事会（2006年3月4日）に、松永正義第八回学術大会実行委員長が出席。

【第4期理事会常任理事会第3回会議議事録】 (抄)

日時：2005年3月4日

場所：東大駒場キャンパス18号館4Fコラボレーションルーム2

1、石田理事長のご逝去に関して。

(1) 常任理事会開催に先立ち、石田理事長のご冥福を祈って黙祷を捧げる。

(2) 理事長のご逝去について：1月8日午後7時45分（現地時間）、肝不全のため台湾大学医学部の病院で亡くなられる。1月15日11時半から台北第2殯儀館にて葬儀がしめやかに行われた。本学会は花輪をお供えた。

(3) 石田先生の追悼会を、関大が3月18日（「お別れ会」）に、台湾史研究会は5月20日頃に開催予定。

2、台湾歴史文化国際学術会議について：会議の1セッションである「新世紀全球化下的台湾研究」に学会として参加し、パネリスト1名を推薦する。但し、会議全体の協賛者にはならない。

3、学報編集委員会について

(1) 掲載論文について：論説6本、書評1本、張炎憲先生記念講演の計8本。

(2) 石田理事長の追悼記事について

4、HPリニューアルについて

5、戦後日本における台湾関係文献目録：3月2日現在、6,475件が登録済。

6、会計より

(1) 会費納入状況について：2006年2月末現在、会員総数439名中2005年度会費納入者318名、未納121名、納入率72%。

(2) 支出状況について：会報発行経費、会議費（特に遠距離交通費）、事務局経費が減少。当初予算1,844,420円（繰越金除き予備費を含む）より30万円下回る見込。

(3) 会計責任者交代に伴う交流協会への挨拶について：2006年2月28日に張理事と川上理事が、交流協会の川田総務部長、藤本参事を訪問。

(4) 会計規則の策定について

7、ニュースレターについて

- (1) ニュースレター第10号刊行した。
- (2) 次号の特集について：石田理事長追悼号となる。次号3月末日発行予定。
- (3) 台湾地方選挙見聞録について
- 8、藤井常任理事より多忙につき常任理事辞任申し出があり、承認される。
- 9、理事長補充の件
 - (1) 学会規約により、副理事長が理事長の職務を代行する。
 - (2) 新理事長については、6月理事会で正式に決定。
- 10、第8回学術大会について
 - (1) 第8回学術大会実行委員長より「日本台湾学会第8回学術大会実施要領案」配布
 - (2) 実行委員：松永正義（委員長）、春山明哲、張士陽（会計）、川上桃子（会計）、垂水千恵（プログラム）、松金公正（報告集）、丸川哲史（事務統括）、橋本恭子（会計）、河原功（書籍販売）
 - (3) 報告集：4月25日を締切り日とする。
- 11、第八回学術大会予算案について
- 12、常任理事会と理事会の開催日：6月2日（金）に常任理事会を15時30分から、理事会を16時30分から開催。
- 13、次期開催校について
 - (1) アジア経済研究所に決定。
 - (2) 第9回大会実行委員長は佐藤幸人理事に決定。
- 14、石田理事長を偲ぶ会について
 - (1) 現代中国学会との共催：6月4日現代中国学会関西部会大会（於関西大学）で、共通論題シンポで「石田浩・人と学問セッション」を開催。アジア政経学会参加予定。
 - (2) 3学会共通で夜に偲ぶ会を開催する。
 - (3) 報告者として佐藤理事を派遣する。
 - (4) 日本台湾学会としての企画：石田理事長の著作目録作成を圖左会員に委託要請。
 - (5) 6月3日に総会前の17時10分から30分に「石田理事長を偲ぶ集い」を開催する。
- 15、会員の退会について：5件。
- 16、会員の入会について：3件。

（総務担当理事 下村作次郎）

II 定例研究会

【日本台湾学会 定例研究会】

第37回（歴史・政治・経済部会）

日時：2005年11月25日（金）18:30～

場所：上智大学2号館10階2-1015a会議室

報告者：劉国深氏（廈門大学）

テーマ：中国大陸的台湾研究（言語：北京語）

第38回（歴史・政治・経済部会）

日時：2005年1月26日（木）18:30～

場所：上智大学2号館10階2-1015a会議室

報告者：松田康博氏（防衛研究所）

テーマ：2005年トリプル地方選挙と台湾政治の動向

第39回（歴史・政治・経済部会）

日時：2005年2月6日（月）18:30～

場所：日大経済学部7号館13階第3会議室

報告者：石垣直氏（東京都立大学大学院博士課程）

テーマ：現代台湾における〈原住民族〉の位置づけー「原住民族自治区法」草案をめぐるー

（編集部）

【日本台湾学会 台北定例研究会】

第33回

日時：2005年11月4日（金）18:00～

場所：国立台湾師範大学総合大樓9階905号室

報告者：前田直樹氏（広島大学大学院）

テーマ：アメリカの台湾政策、1960年ーポスト蒋介石体制・雷震事件への見方を通してー（言語：日本語）

第34回

日時：2005年11月19日（土）15:00～

場所：国立台北教育大学（旧・国立台北師範学院）行政大樓506室

報告者：若畑省二氏（国立政治大学）

テーマ：韓国・台湾の現代政治比較についての一考察ー民主化の「延長戦」？ー（言語：日本語）

第35回

日時：2006年1月14日（土）15:00～

場所：国立台北教育大学行政大樓506室

報告者：岩村益典氏（国立台湾師範大学大学院博士課程）

コメンテーター：蔡水秋氏（淡江大学日本研究所修士課程）

編集後記

今号は石田浩理事長の追悼文集を会員の皆さまにお届けすることとなった。いまだに信じられない気持ちでいっぱいである。この場をかりて想いを表したい。

宗教史を研究分野とする私と経済学者の石田先生との間にはなんのつながりもないと考えられるかもしれない。しかし、ある意味石田先生は「命」の恩人ともいうべき存在であった。

もちろんお名前は前々から存じ上げていたが、はじめての出会い、私が中央研究院の歴史語言研究所の訪問学員をしていた時であった。当時、近代史研究所に半年間の予定で滞在されていた先生は、これまで会った研究者のなかでもきわだって精力的で、そしてなんといっても研究所の助理たちと「仲よし」であった。

当時、中国中古の宗教を研究課題とし、図書館で拓本を読み続けていた私に「台湾」を勧めてくださったのも先生である。その後、いろいろな経緯もあり、私は台湾の仏教と触れ合うことになっていくが、そのきっかけを与えてくださったのは、ほかの誰でもない石田先生であった。何年かたって、たびたび「台湾史おもしろいやろ」といつてくれた先生のことは、今後も忘れることはできないだろう。

ただ、その時々自信をもって「何が」おもしろいか応えられず、「いえ、台湾でやる中古史研究はおもしろいです」といった自らの未熟さもけっして忘れることはできない。

なんのために研究を進めるのか、それを容で示してくれた先生は、研究を「命」とすべきことを教えてくれた恩人であった。

やすらかにやすみください。

（ニュースレター担当理事 松金公正）

日本台湾学会ニュースレター 第11号
発行：日本台湾学会（理事長代行 下村作次郎）
印刷：株式会社 井上総合印刷
発行年月：2006年3月
〔日本台湾学会事務局〕
〒573-0192：大阪府枚方市杉3丁目50番1号
大阪国際大学法政経学部滝田豪研究室気付
E-mail:jats@pel.oiu.ac.jp
〔ニュースレター発行事務局〕
〒321-8505栃木県宇都宮市峰町350
宇都宮大学国際学部松金研究室気付
TEL:028(649)5165（代）、FAX:028(649)5171